

# 秋田の「町おこし」とアトリオン音楽ホール

## AKITAカジュアルアーツフェスタの熱い夏

大星じゅん管理(株)指定管理者事業推進室担当部長  
(前・秋田アトリオン音楽事業部長)

## 壹岐國芳

はじめに

それにしても暑い秋田の夏だった。

「今年の夏、アトリオンビル前の商店街通りで新しいお祭りをスタートさせたい。ついには実行委員長をやってもらえませんか？」

と突然依頼されたのは、秋田県を代表するクラシック音楽ホール（秋田アトリオン音楽ホール）が民間指定管理者制へ移行するに当たって筆者が現地へ派遣された一年目の春、平成十八年五月のことだった。

頼んでこられた方は秋田県庁の文化政策と指定管理者制度の担当官のお二人。筆者が着任挨拶で音楽ホールの新しい運営方針を述べさせていただいた際に、温かい眼差しで頷きながら聴いてくださった班長さんであった。

その新しい祭りの名は『AKITAカジュアルアーツフェスタ』。若者の芸術文化の振興を目的とし、県が地元商店街をバックアップして新たに発足させようというもので、かつては賑わいもあり秋田の銀座通りと評された「仲小路ふれあい通り」を数日間歩行者天国にし、路上で若者たちに「アート制作」と「音楽ライブ演奏」をしてみようというものだった。これを巡る体験を記したい。

拙稿は、当地で行なわれたこのイベントの詳細をPRするのが主旨ではない。また、筆者が担当した音楽ホール経営で「町おこし」の一助になったなどと思いがつたことを書くものでもない。ただか二年間の文化施設の運営だけで、そんな大きなことを成し得る

ような簡単な問題ではないのだ。施設というハコの中の音楽ホールが単独でできることは、人びとの感性と情念に訴えるいわば広域の「エネルギー起こし」のようなものであり、それだけでも大変なことなのだ。

ここでは、兎角に中立的立場や傍観者になつてしまいがちな、いわゆるハコモノ文化施設の一担当者が、地元商店街の新しいイベント発足を目の前にして、どう戸惑い、対応し、得たものは何であったのか。反省も含めて惜越ながら一つの事例提供としたい。

文化施設の民間責任者がなぜ実行委員長に？

しかし、それにしてもなぜ、その実行委員長が県外からの転勤サラリーマンで地元で誰一人として知人のいない筆者でなければならぬのか？ 当地で担う指定管理者事業はスタートさせたばかり。県直営時代の半分のスタッフ人数で運営しながら音楽ホールの年間入場者数と演奏会の質を大幅アップさせようという精神的プレッシャーを抱える秋田アトリオン音楽事業部にも、筆者自身にも、業務上の余裕など本当にまったくなかった。

さらに、「イベント名も決定して開催も間近かなのに、まだ運営体制も決まっていないのか？」と驚いた。一見すると典型的な官主導イベントで、こういう場合、官の側によほどのエネルギーと市民に働きかける情熱がなければ通常は成功しない。少なくとも継続性と自立性の点で危ぶまれる。しかし、それが

必要な秋田中心街区の実情と担当官の本気な姿勢は良く理解でき、その話は東京で同じような課題への取組みを個人的に学んできた筆者の心の琴線に触れた。

傍観者を決め込めば、お祭りエリアに空白地帯を生じかねない。これは放つてはおけないと、変り種サラリーマンの精神が刺激され、結局、筆者はそれを引受けた。

そして『AKITAカジュアルアーツフェスタ』は開催され、今年で三年目、いよいよ運営委員会自立へ向け、県のバックアップ最終年度を迎えるまでになった。



仲小路ふれあい通り 炎天下の路上アート制作風景

## 中心街区空洞化と公共文化施設の立場

「駐車場が無料な郊外大ショッピングセンターへ人が流れて中心街区は空洞化する」という深刻な社会現象は、秋田県も例外ではない。アトリオンが立地する秋田市の中央街区は、映画館などの娯楽施設も併設された郊外の大規模店に顧客を奪われ、商店街はかつての賑わいを失った。交通機関を自家用車に頼ることの多い地方都市特有の悩みだ。

「ですから、活気を失った街の活性化のために、当事者である地元商店街の皆さんとともに何か手を打ちたいのです」と情熱を込めて私を説得する県文化行政の担当官さんは、官主導だけでは成功しないことも良く知っておられた。だから第三者ともいえる筆者に、商店街と諸関係者たち、そして県との調整役を期待されたのだった。

しかし、「町おこし」といえば、わざわざ新しい祭りを創らなくても、秋田には伝統の大きな祭りがあり、それが数百年間、今に至るまで町おこしを続けてくれているのではないか。脳裏にはそんな疑問も湧いた。

## 秋田市内の祭りと「仲小路ふれあい通り」

秋田市の夏といえば有名な竿灯祭りだ。毎年七月ともなれば町内各地で練習が始まる。たわなに実る秋田こまちの稲穂の如く、たくさんさんの提灯をぶら下げた長く重たい竹竿を頭や腰にのせる人びとの姿は実に勇壮だ。八月初旬、本番夕暮れ時の大通りには、数十本の

竿灯が一斉に立ち上がり、観光客の大歓声が沸きあがる。

ここで紹介する「仲小路ふれあい通り」の商店街は、この竿灯大通りとJR秋田駅を一直線に結ぶ中間点にあるファッションと食事のおしゃれな町である。（秋田アトリオン音楽ホールは、この通りに面している。）

日頃は人もまばらなこの通りも、竿灯祭りの時期ばかりは浴衣姿で行きかう人々でかつての賑わいを取り戻す。しかし、祭りも終わってお盆の時期ともなると、再び閑散とし、「秋田の夏もまた終わってしまった」と、心どこか秋風が吹く例年であったそうだった。

このような状況をなんとかしようと先行して奮起した他の商店街もあった。秋田市の中央を南北に流れる川の西側（仲小路商店街は東側）に位置する大町周辺の商店街群がそれだ。ザ・パワーオブミュージックフロムアキタ、通称PMAと呼ばれるそのイベントは、大町周辺の六つの青空会場で多種多様な音楽コンサートを二日間にわたって繰り広げるといふもので、すでに前年に一定の評価と成果を収めていた。吹奏楽や合唱がもともと盛んな秋田県には、アマチュア音楽家人口が多く、そうした県内各地の若者の中からボランティア運営委員が生まれてきたのだそうだった。

しかし、このストリート音楽イベントも、まだまだスタートしたばかり。JR秋田駅からは歩いて遠く、地域的に孤軍奮闘しているといった感もあった。

そんな状況の中、県が仲小路の商店街にイベント開催を働きかけ、「ふれあい通り仲小路振興会」と商店街の「おかみさん会」が立ち上がった。そして筆者を調整役として発足したのが本稿でご紹介する「AKITAカジュアルアートツフェスタ」である。

この新しい祭りの計画は、伝統的な竿灯祭りだけで糾合しきれない今の若者たちのエネルギーを、「路上アート制作」と「路上ライブ演奏」、つまり美術と音楽の形で発表してもらい、町を活性化させよう、というものであった。人口減少率と少子化率ワーストワンの秋田が元気になるためには、地元の若者たちに何かの発表の場を提供することも必要だと考えたわけである。開催時期は、竿灯祭り後で通りが閑散としてしまう真夏八月お盆前後の三日間とした。

## AKITAカジュアルアートツフェスタ

実行委員のメンバーは、アートギャラリー経営者や高校生やヴァイオリニストなど「美術や音楽にたずさわる人々」と、「会場となる仲小路商店街」の会長とおかみさん会の人々、そして仲小路に面するアトリオン音楽ホールの筆者など、計十六名。

県職員の方々は、縁の下でこれをバックアップするという体制をとった。三年間で祭りを自立させてあげたいという担当官さん苦心の体制だ。実際に、県の文化行政担当部は全員体制で炎天下の無料駐車場管理から会場設

営・撤収まで汗を流して下さった。誠に、仲小路は良き担当官を得たといえる。

開会式冒頭、僭越ながら筆者は「ご挨拶のこぼとして、次のように申し上げた。「『街を歩く人』も『商店街』も『文化団体』も『行政』も、秋田の若者たちの芸術活動と才能を温かく育み、町も共に育って行く。このカジュアルアートツフェスタが、そんな秋田の文化的な街づくりのきっかけとなればと願います」と。

運営関係者の働きで特筆しておきたいのは、「おかみさん会」の皆さんのことだ。北国秋田といえども真夏は四十度近くの猛暑。そんな中、笑顔で冷たい麦茶を無料で振る舞い、餅の着物姿で秋田名物「ババヘアアイス」を販売する傍ら、演奏者に拍手を送ったり、後片付けをしたり。その働きぶりは目覚しく、商店街が心温かく今も息づいていることを誰にも感じさせてくれた。スタートはたしかに官主導だったかもしれないが、民間主導に移行しつつあることを実感した場面の一つだ。

因みに、カジュアルアート一年目の参加者は次のとおりであった。

- ・来場者数 延べ六千名
- ・出演者団体と人数

美術部門 一六団体 九三名

音楽部門 二二団体(含、個人) 八四名

運営面ではやりにくい点もあった。制作したアート作品はアトリオンビル内の展示室で引き続き公開するのだが、会場は年間を通じ

て予約率ほぼ百パーセント。まとまった日数を借りられるのは、お盆休みの時期しかない。路上での音楽ライブだけならばなんとかなりそうな日程調整も、美術制作の路上パフォーマンスを同時に行なうとなれば、思わぬ日程上の制約が生じてしまうことを知った。

おかげで暑い秋田の夏を思いっきり味わうことになったが、前述の麦茶サービスの効果もあり、結果的に一人として病人は出ず、この心熱き夏を良き思い出とすることができた。

歩行者天国にすると、たちまち「通り」は「おしゃれな広場」と化し、「ゆっくり良く見ると、ここは良い街ですね」と感嘆するご来場者も多かった。たしかに、道路を車が走らないという安心感があると、街の見え方はまったく違ってくる。出演者も来場者も共にそれを感じたようだ。

## お祭り参画で生まれた地元商店との信頼

一つのイベントだけで商店街の売上げが増えるような甘い世の中ではないので、これで「町おこし」が成ったなどとは夢にも思わない。しかし音楽ホール事業にとっては、地元商店街からやや遊離していた音楽事業に足場ができて、お客様との接点は格段に広がった。その意味では実に有益で、筆者は地元の様々な方々との交流によって多くのことを学ばせていただいた。このことは大きかった。

いま、商店街や他施設の方々との信頼関係が生まれ、アトリオン主催コンサートのチケ



アトリオンビル前でのダンスパフォーマンス風景



開会ご挨拶風景（写真右側は筆者）

ットや公演プログラムを公演当日に提携店に持参すれば、おそば店では野菜のてんぷらがサービスになったり、レストランではコーヒ

一杯無料セットになったり、菓子店では買物ポイントが増えたりするまでになっている。公演ポスターやアトリオンの催し物案内パンフが店々に置かれているのはもちろんのことだ。二年前には誰一人として知り合いがいなかった筆者は、涙の出る思いである。お陰様で経費の関係で有料にせざるを得なかったアトリオンメンバーズ制度は、無料の情報会員制へ発展的に収束。これにより多くのお客様へ、無料で音楽ホールの情報発信と特典のご提供が可能となった。

### その後のアトリオンの指定管理者事業

筆者は今春、秋田アトリオン音楽ホールの指定管理事業立ち上げと基盤づくりの二年間を終え、後任者に事業を託し秋田の地を離れた。現在は東京本社指定管理者事業推進室で事業をバックアップする体制をとっている。

この二年間、アトリオンはお客様の温かいご声援のお陰で、有料公演の年間入場者数で県直営時代の約二倍近くとなることができた。三年目の今年もメイン主催公演は満員盛況の好スタートを切り、県の文化事業の赤字圧縮に多少なりとも貢献させていただいている。「文化事業は数字実績で評価されるべきでない」という意見もあるが、お客様への広報から施設利用のサービス向上まで、当り前のやるべきことを正しくやれば、それだけでも実績は如実に向上することを経験した。また、公演内容と領域バランスに気を配ることの重

要性、お客様満足度の向上取組みの大切さも学ばせていただいた。

成果に「量」と「質」の両方が求められるのは、民間では当然のこと。担当者としてはつらかったが、一方を追求するのでもう一方はその責を免れるというものではなく、多角的な手法でその両方を達成しなければ、どちらも成しえないのだということを知った。

### おわりに

カジュアルアーツフェスタは、まだまだ課題山積。これが果たして成功といえるかどうか、正直のところ誰にもわからない。

しかし、少なくとも次のことはいえる。官と民の組織や年代層のカベを超えて、実行委員メンバーの中から「わが街の明日」を熱く想う人びとのネットワークと、情熱と実力のある若者たちが数多く現れ始めたのだ。先行してがんばっている大町の音楽イベントPMAと連携したり、仲小路JAZZフェスティバルという新たなイベントを生み出したりという動きもその後出てきた。点のエネルギーが線となり、面へ進み、JR秋田駅からの人がびとの動線を作り出そうという若者たちが出てきて、今ではそれらの若者が実行委員の中心だ。カジュアルアーツフェスタは、とにかく人びとの「エネルギージ起し」にはなった。そのことだけは確かであり、むしろ、それこそが一番の価値ある成果ではなかったか。いま、はつきりとそういえる気がしている。